

近年の名前にはジェンダーがどう反映されているのか？

ジャンカーラ・ウンサーシュッツ

近年では、日本の名付け習慣が大きく変化していることが注目されている（小林、2009；Ogihara et al., 2015；佐藤、2007；徳田、2004等）。名付けにおける変化として、性別を表すことが多い止め字の衰退が指摘されることが多く（橋本・井藤、2011；小林、2001；Komori、2002等）、名付け習慣における変化は、ジェンダー表象にもかかわると考えられる。だが、ジェンダーの観点からの研究はまだ十分だとはいえず、ことに名前が中性化していると推測される傾向が、近年の流行以前より今なお強まっているのではないかと見られるが（佐藤、2007；寿岳、1990）、実態はまだ確認されていない。

本研究では、子どもの名前でジェンダーがどう表現されているのかを検討し、名前における中性化がどの程度起きているのかを検証する。日本の場合、行政機関より一般公開されている名付けに関する大規模なデータはないが、佐藤（2007）に従い、12市町村（北海道・東北・中部・関東・近畿・山陽・四国・九州・沖縄から1の市町村ずつ、および市町村の人口的規模の偏りを避けるために関東より2、北海道より1の市町村を追加）の広報誌における子どもの出生告知欄・子どもへのメッセージから名付けデータを抽出した。最低でも全国の25%の市町村の広報誌に名付けに関するコラムが見られ、そのほとんどに子どもの名前の漢字表記と読み・年齢・親の名前が記載されている。これらは完全公開で行政機関から刊行されていることより信憑性の高い資料だと考えられる（Unser-Schutz, 2018）。

調査は2012年1月～2016年12月までの刊行誌を対象とし、子どもの名前が2,627個（女子名：1,219個、男子名：1,408個）得られた。子ども世代と親世代の名前の比較ができるよう、親の名前（母親名：2,264個、父親名：2,218

個)も抽出した。子どもの名前に関しては、異なる音声形・表記形の個数と付けられた頻度を分析した上、女子名と男子名の共通点と中性化の可能性を検討した。親の名前に関しては表記形のみが記されているため、表記形の個数と付けられた頻度を分析した。子どもと親に付けられた名前・子どもの名前と親の名前に用いられた漢字も確認した。区別のため、子ども世代の名前を「女子名」「男子名」、親世代の名前を「母親名」「父親名」とする。

分析の結果、音声形が異なる子どもの名前が939個であった。そのうち、女子名・男子名として用いられた名前はそれぞれ374個・496個であった。男女共に用いられた音声形の名前は69個で、7.50%に過ぎなかった。一方で、表記形が異なる子どもの名前は2,037個で、そのうち女子名・男子名として用いられた名前はそれぞれ887個・1,110個であった。男女共に用いられた名前は40個(1.96%)で、音声形と比べても少なかった。子どもの名前に571字の異なる漢字が用いられ、そのうち178字が男女共に用いられた。これらの男女ともに用いられた漢字は、女子名に用いられた全漢字の75.88%を占め、男子名の52.69%と比べて高かった。

表記形が異なる親の名前は全部で2,545個抽出され、そのうち27個が母親名・父親名の両方で用いられた。表記形が異なる母親名が1,051個、そのうち90個(9.22%)が女子名にも用いられた。一方、表記形が異なる父親名は1,467個で、そのうち108個(7.36%)が男子名にも用いられた。女性名として用いられた父親の名前、男子名として用いられた母親の名前はわずかであった。親の名前には549字の異なる漢字が用いられ、母親名と父親名に用いられた漢字はそれぞれ152字・220字であった。また、どちらか片方にのみ用いられた372字のうち、152字(40.86%)が子どもの名前に見られず、子どもの名前と親の名前に用いられた漢字のセットがさほど重複していないことを示している。このことより、名前に用いられる漢字の流行の変化が大きいことが読み取れる。

上記の結果より、親の名前がそのまま子どもの名前に使われること、また親の名前に用いられた漢字が子どもの名前に使われることが少なくなっていることが改めて確認できた。しかし、親世代とはまったく異なるにもかかわらず、子ども世代の名前においても性別による差が明らかにあることから、

名付けにおいて中性化が進んでいるとは言えない。また、名前における性差が、名前に用いられる漢字や名前の構造等で、これまでとは異なる形で表現されていることに注意する必要がある。

[参考文献]

- 橋本淳治・井藤伸比古 (2011) 『「子」のつく名前の誕生』 仮説社。
- 寿岳章子 (1990) 『日本人の名前』 大修館書店。
- 小林大祐 (2001) 名前の社会的分析に向けて：漢字がつくる同一性のなかの差異『評論・社会科学』 65, 23-41.
- 小林康正 (2009) 『名づけの世相史「個性的な名前」をフィールドワーク』 風響社。
- Komori, Y. (2002) "Trends in Japanese first names in the twentieth century: A comparative study." *International Christian University Publications 3-A: Asian Cultural Studies* 28, pp. 67-82.
- Ogihara, Y., Fujita, H., Tominaga, H., Ishigaki, S., Kashimoto, T., Takahashi, A., Toyohara, K., Uchida, Y. (2015) "Are common names becoming less common? The rise in uniqueness and individualism in Japan." *Frontiers in Psychology* 6, pp. 1490.
- 佐藤稔 (2007) 『読みにくい名前はなぜ増えたか』 吉川弘文館。
- 徳田克己 (2004) 名づけの心理 2：読みにくい名前の分析『日本教育心理学会総会発表論文集』 (46), 623.
- Unser-Schutz, G. (2018) 資料として日本の名付けに関する研究に広報誌を用いる可能性について『立正大学心理学研究年報』 9, 23-35.

(ジャンカーラ ウンサーシュッツ・立正大学准教授)